

菊川西中だより

校長室の窓

「命令・叱責・体罰を
超えて」身に付く
真の力を求める



2学期がスタートしました。運動部は夏休みに新チームに替わり、2年生を中心に暑い夏の練習を乗り越えてきました。来月末から各部の「新人戦」も始まります。新人戦は「**準公式大会**」とはいえ子どもたちにとっては大切なデビュー戦です。ここ数年スポーツの世界における「体罰」の話題が新聞紙上をにぎわしています。**競技スポーツ**は苦しいのが当たり前です。金メダルを取るためには、精神的に強くなる必要があります。そこで、「〇〇精神を入れてやる！」となって「命令口調の叱責」「体罰」が半ば公認されてしまいます。私も20代の頃、同様な傾向にありました。例えば、練習に遅れて来た子がいたとしましょう。若い頃の私なら「気合が入っていない。お前何か練習しなくていい！」と怒鳴りつけて、休日の練習なら「体育館の脇に半日くらい立たせて」おいて、本人に反省を求めました。しかし30代以降、もちろん、練習サボりは注意しますが、練習は普通にさせます。その子がいいプレーをしたら「ナイスプレー！」と声をかけます。「部活動としての練習をサボること」と「練習でいいプレーをすること」は別と考えるからです。

さて私が監督していた女子バスケット部の事です。日曜日の練習です。7時集合なのに、キャプテンの子が髪の毛ボサボサという状態で、30分遅れて来ました。「どうしたんだ!」「すみません。寝坊です。」「わかった、すぐ準備運動をして練習に入れ!」その後この子は、半日の練習メニューをこなし、キャプテンとしての責務を果たしました。しかし、次の日に遅れてきた真相をこの子の学年主任から聞いてびっくりしました。

実は前日の夕方、この子は見知らぬ年上の青年の車に乗り、徹夜で遊びまわった挙句、朝の6時に家に帰って来たのです。この子の学年の先生達は手分けして徹夜で捜索したそうです。もちろん家に帰った後、両親や先生から事情を聞かれたり、指導を受けたりしたと思います。そして、朝食もそこそこに、7時30分には体育館のコートに立っていました。ここからは私の推測ですが、きっと「先生は遅れていっても練習させてくれる。大好きな仲間と先生(自画自賛?)とバスケットが出来る。」という思いがあったと思います。私はこの学校の女バスで「サボるな」と言った記憶がありません。しかし、「来るのは当たり前」「来たら、友達や先生と練習できる」「練習したら、上手になって試合で勝てる」「楽しいからまた来よう」という循環でチームが出来ていきました。女バスは大所帯でした。50人くらい部員がいます。50人の女子中学生が集まると、揉め事や不仲もあったでしょう。しかし、彼女たちはそれを自分たちで克服して強いチームになりました。(全国レベルからすると知れてますが……)「スポーツ指導に体罰は必要ない。競技の楽しさ、チームの楽しさ」を満喫させてやるのが、すべての基礎・基本だと思います。

(文責:校長)